『昭和二十年八月十五日』

―私はこうして迎えた(二)

会員　米水津村浦代浦　成松　通
〃　浦代浦　宮城　清
〃　小浦　御手洗　進
〃　小浦　渡辺　豊光

この作品は『米水津村の歴史を知る会』が平成五年八月発行した文集の中から、一八二号に続き転載したものです。

『私の八月十五日』

成松　通

私は昭和二十年三月三十一日、第一期陸軍航空特別幹部候補生として加古川陸軍航空通信学校を卒業、同日付けで第二十一航空情報連隊(別称、帥二十一部隊)に配属を命ぜられ、福岡に移動(旧福岡城内の連隊本部・現平和台)毎日軍用トラックで大刀洗飛行場の防空壕掘り作業をしていた。

数日後、宮崎県日南海岸に展開中の折生迫(おりおさこ)航空警戒隊に配属され班長として勤務、連日九州爆撃のため敵機動部隊空母から発進して、日向灘から侵入するグラマン・ロッキード戦闘機等の捕捉に昼夜三交替で勤務、レーダー(開戦後捕獲試作した要地用と移動用の二種類があったと記憶する)により敵機の侵入捜索を主任務とし、連隊本部に侵入機数・方向・速度等を暗号電報(略数字)で打電、各地区警戒隊からの報告に基づき、西部軍管区で警戒警報・空襲警報を発令するシステムになっていた。非番の昼間は防空壕の補強・陣地構築・偽装等作業の日々であった。

戦況は既にマニラ・硫黄島・沖縄も陥ち、連合艦隊は壊滅的打撃を受け、日本近海は敵の潜水艦による船舶の被害、空母から発進する艦載機と、マリアナ諸島を基地とするB29の爆撃により、軍事施設と軍需工場は甚大な被害を受け、都市部は無差別焼夷弾爆撃により焼け野原となったが軍は本土決戦を策定、米軍の上陸予想海浜に師団の移動配備(主に関東軍からの転用師団)と、陣地構

築に軍民挙げて鋭意本土決戦の準備中であった。

八月六日広島・八月九日長崎に原子爆弾が投下され、同日ソ連が満州国(ソ満国境)への侵攻開始を軍情報で伝達された。数刻後「水戸航空通信学校に下士官学生として入校を命ず。移動完了八月十五日」との命令を受領。あわただしく十一日南宮崎駅から乗車、空襲による旅の不安と戦況を憂慮しながら一路東京へ出発した。

途中築城駅付近で敵艦載機の機銃掃射を受けて果樹園に退避、友軍機の攻撃も地上砲火もなく敵機のなすがままで、日本空軍の戦力の低下に不安がよぎる。列車や乗客に被害はなく、約二時間遅れで列車は出発した。夕方門司に到着したが東京行の列車がないので、駅前の旅館に一泊し翌早朝門司を出発、途中で数日前に原爆の被害を受けた広島の悲惨な状況を車窓から見たが、その威力に驚きながら通過し、なお数回の空襲退避を繰り返しながら、やっと十四日夕方おそく東京駅に到着した。巡査の案内で、灯火管制で暗く廃墟と化した町並みに驚きながら、神田ニコライ堂近くの素人下宿のような旅館に、四日間の旅の疲れをいやすことができた。夕食は何を食べたか記憶にない。その時女中さんから、明日十二時天皇陛下の重大放送があると聞いたが、べつに気にもとめず、敵機動部隊に大打撃を与えたか、ソ満国境に不法侵攻したソ連軍に、精強関東軍が壊滅的打撃を与えたのではないかと思いつつ深い眠りについた。

翌八月十五日八時頃、女中さんがこんなものしかなくてと言いながら朝食をもってきた。野菜のはいった雑炊と、碗の底が見えるようなうすい味噌汁に梅干がそえてあった。新聞紙の包みを差し出し「お弁当です」と言う。「昨夜頂いたお米はこれで全部です」と言って脇に置いたので、「昼頃までには水戸の部隊に到着できるので皆さんで食べて下さい」と返し、雑嚢の中から靴下に入った残りの米と、鰯の缶詰一個乾パン一袋を取り出し、「私は部隊に到着すれば心配ないから」と言って差し出すと、畳に頭をすりつけるようにして「今夜は子供達にお米のご飯が食べさせられます」。と何度も深々と頭をさげていた。これ程食料に困っているのかと思った。昨夜見た空襲の被害、車窓から眺めた広島の惨状、敵機攻撃等で満足に汽車の運行もままならぬ状況を体験し、大本営が決行せんとする本土決戦は完遂できるのかと、不安を感じながら玄関で軍靴の紐をしめていると、

突然うしろから「兵隊さん貴重な品を頂いて有り難う、兵隊さんの御武運を祈ります」。と老夫婦の目に涙を浮べた姿があった。銃後を護る老人までが必勝を信じ、困苦欠乏に耐えて私達若者に期待をかけているのに、どうしてこんな弱気になったのかと恥かしく思い、「勝利の日まで頑張ろう」と決意をあらたにした。今でもその情景は生々しく瞼の内にしかも鮮烈に映し出される。焼けのこったビルの谷間を歩いて、ふたたび東京駅から電車に乗り上野駅についた。食料の買出し客で混雑する常磐線に乗って水戸駅に向かう。途中土浦駅で乗車したと思われる中年の男性が、「日本が負けたぞ無条件降伏だ!!」、昼の放送で天皇陛下が「忍び難きを忍び」と放送されたと、わめくように言っているのを聞き、車内は騒然となったが、そんな馬鹿なことが?、デマ放送ではないかと心の内で否定しながら、とにかく学校にいけばと思いながら道をいそいだ。

水戸駅から航空通信学校までは、四キロ程もあろうか、敗戦の不安を抱きながら暑さと砂ホコリの立つ道を歩いてやっと校門を入ると、何か異状な緊張感がひしひしとつたわってくる。途中汽車の中で降伏したらしいとの噂は本当なのかと思いつつ、衛兵所で到着を告げ隊舎をたずねると、営舎係伍長が奥から出てきて、「負けたのにご苦労、何処からきたのか」と言われ、質問に答える余裕もなく、やはり本当だったかと口惜しくて両眼から熱い涙がとめどなく頬をぬらした。今振り返ってみると、種々の苦労を体験し、やっとの思いで移動完了日までに学校にたどり着いた安堵感と、敗戦という極めて大きなショックが重複したのであろうと思う。やゝしばらく間をおいて、「第二十一航空情報連隊九州からです」と答え、学生隊舎への道をたずねた。

説明されたとおり進むと学校本部の左側は格納庫がならび、飛行場では離着陸する飛行機の爆音もなく、航空服姿の将校が散見されるだけでひっそりとしていた。学生隊舎の事務室で、年配の人のよさそうな人事係准尉に到着の申告をした。准尉は姿勢を正し、やゝしばらく間をおいて穏やかな声で「天皇陛下の玉音放送で戦争は終った」。校内に不穏な動向があるので指示あるまで許可なく隊舎外に出ることを厳禁する。軽挙妄動することなく静かに班内で待機するようにと指示された。言葉の意味が充分理解できなかったが、漠然と何か不吉な予感

がした。週番上等兵の案内で指定された内務班の部屋に入った。いきなり大声で「成松遅いぞ、途中でトンズラしたのではと心配したぞ」。と聞きおぼえのある声がした。それは加古川航空通信学校で同期の宮田候補生であった。(鹿児島県出身・昭和二十九年頃自衛隊調査学校で再会現在音信なし)

まもなく、「学生は申告の服装で舎前に集合せよ」。と週番上等兵の声がひびいた。舎前に整列し、学生隊長に対し「〇〇候補生以下十八名、昭和二十年八月十五日水戸航空通信学校・航空情報課程学生として入校を命ぜられました」。と大声で申告が終わり、若い隊長(少佐)が大要次のような訓辞をされたように記憶している。「諸君は聖戦完遂と必勝の信念をもって全国各地から入校してきたものと確信しているが、既に知っているように御聖断は降り戦争は終結した。校内には一部の将校・下士官が厚木海軍航空隊と連携し、徹底抗戦・国体護持を叫び、校内にビラを撒いたりしている状況で、今後当学生隊にも勧誘が活発に行われるものと推測されるが、!!もう終戦の大命は降った!!のだ。我々軍人は天皇の命令に服従するを本旨とする。諸君は沈着冷静によく考え軽挙妄動することなく、別命あるまで静かに隊舎内において待機せよ」。と涙ながら諭すように訓辞されたが、学生は皆口惜しさを胸の内にひめ、拳を握りしめすすり泣いていた。記憶をたどりワープロのキーを打ちながら、四十八年前の出来事が昨日のように鮮烈に想い出され、再び激動の青春時代にひきもどされたような興奮を覚えた。

これからの日本はどうなるのか、天皇制は護持されるのか、我々は捕虜となるのか、家族は、不安材料だけが頭の中をかけめぐる。学生は徹底抗戦派と終戦派とに意見が分裂したが、やはり抗戦派が多数であった。私も抗戦派で毎日悶々として眠れぬ夜を過した。意見の根底をなすものは戦陣訓に示された「生きて虜囚の辱かしめを受けず」、国体護持・神州不滅(元寇の時のように神風が吹く)、戦死した護国の英霊に申し訳がない。等の考えに基因したものと思うが、内心では敗戦後の恐怖感が心の片隅にあったと思う。終戦派は軍人勅諭に示された「天皇陛下の命令には絶対服従」が軍人の本分であり、苦難はあるが優秀な大和民族は立ち直れる。占領政策に不安はあるが、今考えているような苛酷なものではなか

ろう。又神風なんてナンセンスだ、終戦の詔勅に示されたように、「耐え難きを耐え忍び難きを忍び」という聖旨を遵法すべきのみと、極めて常識的な主張であったように記憶している。

内務班での缶詰生活は次第に口数も少なくなり、陰鬱な日が多くなった。飛行場の方で煙があがっていると窓際で叫ぶ者がいたが、夜おそくまで赤々と夜空をこがしていた。多分機密文書・暗号書を焼却していたものと思う。二十日には復員命令が下達され、旅費・一週間分の米・携行糧食の支給が始まり、奇しくも八月十五日水戸航空通信学校で移動完了日を迎え、純粋に青春の血を沸せた五日間であったが、アッケない幕切れでもあった。長くて短かかったこの五日間を私は終生忘れることはない。

あとがき

瓦礫と混乱・飢餓の中から四十八年の歳月が経過し、私も齢六十九歳となりましたが、好い後継者と孫達に恵まれ、熟年を愉しむ今日この頃です。世界一の経済大国となり、国民は平和で豊かな生活を享受しています。これは日本民族の優秀な国民性と、恒久平和を念願し努力した結果と確信しています。沖縄日本復帰の際、当時の総理大臣が「日本の戦後はこれで終わった」と声明したが、北方領土・中国残留孤児・従軍慰安婦問題等々、未だ未解決の諸問題が山積しています。一日も早くこれら諸問題を解決し、全世界の恒久平和と理想の実現に日本が出来る範囲内で積極的に貢献し、一日も早く世界から戦争がなくなることを念願する一人です。

四十八年前の終戦記念日を回顧するとき、この大戦中戦場で国のために殉じた百九十五万人余柱の英霊と、空襲で或いは外地からの引揚げの途中等で死亡した一般邦人六十五万人のことを忘れてはならないと思います。

ここに謹んで、この大戦の犠牲となられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

『私の昭和二十年八月十五日』

宮城　清

昭和二十年といえば思い出多い年である。一月に父を